

研究論文

1960年代『装苑』とパリ支局
～海外情報と誌面の変化～

田中 里尚* 古賀 令子*

“SOEN” and the Paris branch of it in the 1960’s
～Westernization of “SOEN” in consuming society～

Tanaka Norinao* Koga Reiko*

要旨

日本ファッションにおいて雑誌『装苑』は重要な役割を果たしたが、その60年代における変化について本論では明らかにした。「洋裁研究」という形で自誌の方針を表明していた『装苑』は、1960年代に方向転換を行うが、1950年代において警戒しつつあった浮薄な流行という現象に対して、門戸を開き、それを推進する立場に自誌を置くということであった。流行の中心であるパリに拠点を設置することを目指した『装苑』は、高田美や堤邦子らと協力してパリとの繋がりをつくり、とうとう1966年10月に誌上でパリ支局の開設が表明された。こうしたパリ支局の開設準備の中で、『装苑』の誌面上に変化が生じる。第1に、表紙に表明されていた「洋裁研究」という方針が「Fashion Magazine」となったことである。これによって流行情報のみならず、旅行やレジャーの記事も増加した。第2に、アルファベット表記である「SO-EN」のロゴ開発も進み、欧米的な方向へ自誌の印象を変えようとした。そして、1960年代後半には、目次の中に「SO-EN」というロゴの文字の用いられた記事も頻繁に登場してくることとなった。第3には、アートディレクター制を表明するとともに、海外情報のページも製図中心から情報中心に変化していくこととなった。このように、1960年代における『装苑』は海外情報と関係を密にしながら、誌面上の改革を進めていったのである。

(キーワード 欧米化: westernization, 『装苑』パリ支局: the Paris branch of “SOEN”, 消費社会: consuming society)

1. はじめに

文化出版局より1936年4月に創刊された『装苑』は、記事を通じて、読者の技術を教育し、洋装の知識を広めた役割を持っている。

しかし、『装苑』に関する先行研究は必ずしも多いとは言えない状況にある。代表的なものとして、高橋知子による『装苑』の洋裁技術における海外情報の導入に関する研究¹⁾のほか、拙稿による占領期における『装苑』に関する研究²⁾、そして工藤雅人による1950年代から60年代にかけて

『装苑』が「服飾雑誌」として形成していく過程の研究³⁾などがあるが、充分とはいえない。しかし、いたずらに全体性の研究を行うのではなく、生産者および誌面内容に関する実態的な研究を行っていく必要があるだろう。

本稿は、それらの先行研究を踏まえて、『装苑』の1960年代から1970年代にかけて、海外情報の導入による、誌面の変化を質の点から考察することによって、『装苑』自体の変化を論じることとする。

『装苑』を研究するにあたって、1960年代の『装苑』に着目する理由は、まさに編集方針の揺らぎ

*文化女子大学

がその時代に見えるからである。すなわち文化出版局は1960年代を迎えるにあたって『ハイファッション』（1960創刊）と『ミス』（1961創刊）という2つの新雑誌を創刊することで、それらと『装苑』の位置づけを調整しなくてはならなくなり、1960年前後に誌面の改革を頻繁に行っているのである。

「昨年十月号を契機として編集上に大刷新を加えてから、今年で満1カ年となりました。当時は読者の方の中には多少なじみにくいという声もありましたが、編集上にも工夫を加えたためか、号を追うに従って読者の支持が増え、いまではもっと革新を行ったらという声さえ聞かれるようになりました。」⁴⁾と「編集後記」に書いてあるように、1959年10月には誌面刷新が行われて、読者の支持を受けていることがわかる。また、「新年号はごらんとおり、だいぶ趣向を変えてみました。二色グラビアを設けたり、読み物ページを多くしたりしたほかに付録のグラビアの紙質を向上させました。ページにも変化をもたせるために外国モードを前のほうへ持っていったりして、いろいろと入れ換えました」⁵⁾と述べられているように、この時期に様々な刷新が模索されているのである。本稿では、これ以降の1960年代に『装苑』がどのように立場を変えたのか、その契機には何があったのか、その結果誌面はどのように変化したのかという問題について明らかにすることにした。

2. 海外情報への対応の変化

『装苑』が初めて大々的にパリ・コレクションを取り上げたのは1955年10月号の「本誌特写 秋冬のパリ・モード集 1955～6年秋冬のコレクションから」である。それが掲載された号の「編集後記」では、「HだAだやれYだと忙しいことで何もパリでどんなデザインが発表されようと、私たちのつまましい衣服には何の関係もありはしない—というこんな考え方には、生活人としての私たちは大いに同感なのであるが、編集者という職業人としての考え方からすれば、そうはっきりと割り切れない。…（中略）…本号でパリの巨匠

たちのコレクションを賑わしく発表したのも、そんな見解からで、世界的な行事に対して目をふさぐということは、編集者の怠慢であろう。かといって、盲目的にこれに飛びつくのは、どうかと思うし、要は世界性の中に住みながら日本の服装というものについてじっくり考えることである。どうかそのつもりでござんいただきたい」⁶⁾と述べられている。これをみると、流行という現象に対して警戒感を持っていることがわかる。すなわち『装苑』としては、日本国内の洋装文化が未成熟の時期に、海外の流行に踊らされることは適切でないという考え方があったのだ。

この姿勢は1960年代に入り、先ほど述べたような誌面の刷新がはかられた後にも、「この創刊の精神は、歴代の編集長に受けつがれ、いたずらにトップモードを追わず、またことさらに排他的にならず、つねに穏健中正、読者のために奉仕しつづけるという方針を堅持してきました」⁷⁾というように、海外の流行情報に対する警戒を忘れていないことを念おししている。

加えて「このところ、服飾雑誌をはじめ、各種の婦人雑誌が外国の雑誌と契約をむすんで、誌面にそういうページを特設することが流行しています。装苑はどこの雑誌と特約しているのかというお問い合わせがあったりしますので、ここではっきりご説明したいと存じます。本誌は外国のどこの雑誌とも特約しておりません。こんごも特約することは、まずないでしょう。その理由としては三つあげられます。第一に、私たちは私たちの信念のうえで雑誌をつくっているのですから、他の編集者がつくった雑誌のためにページをさきたくないのです。自分の雑誌の読者をもっともよく理解しているのは、自分たち以外にはないと思っています。つぎに、日本の服飾界に大きな期待を寄せているからです」⁸⁾と語られているように、日本の読者の生活に合う洋装を提案する使命を自覚する『装苑』は、海外の流行を無自覚に国内に持ち込むことには批判的な姿勢をもっていたのである。

そうであるなら、パリ・コレクションを報道することすら自粛してもよいであろう。しかし、『装苑』にはそれと相反する姿勢もあった。自誌の立

場を伝えながらも、海外情報の獲得についての布石を打っていたのである。

「今月号には大きな発表が三つあります。まず、パリ・コレクションですが、例年以上に充実した取材陣で、巻頭に発表いたしました。パリ・コレクションも数年前からすっかり地についた感じで、AラインとかYラインとか奇をてらっていたころのことを思えば、現在のファッションの流れがいかに自然な方向をたどっているかがおわかりと思います。現地座談会は本誌の独断場です⁹⁾と「編集後記」で告げているが、パリコレ自体が日本の事情にあわせて変わったわけではないのだから、ここでの『装苑』は、かつてのパリ・モードを警戒する立場から、積極的な報道者の姿勢となっていることがわかる。

このように1960年代はじめに『装苑』の中では、海外モード情報に対する態度の変化が起こりつつあったことは明らかである。海外モード情報とは、当時、パリ・コレクションにおける流行情報のことにほかならなかった。日本独自の服装文化の発展を目指した『装苑』は、1960年代初めには、海外モード情報を日本に取り入れる姿勢を示し始めたのである。

3. 海外ロケとパリ人脈

その翌年の1964年には、オリンピック開幕にちなんで大々的な海外ロケが行われた。「また年に二回のパリ・コレクションのシーズンがやって来ました。'64～'65秋冬のものは開幕が遅れ二十七日となりましたが、そのニュースをいち早く来月号でみなさまにおおくりするため、本誌では7月2日から、久田記者をパリに送りました。本誌特派員は、オリンピックを迎える十月号に特集する「オリンピアの聖火をたずねて」の撮影を兼ね、アテネにも立ち寄ります。一行はモデルの松田和子、山田輝子、高野カメラマン、久田記者の4人です¹⁰⁾と「編集後記」では述べられ、ギリシアの背景の中で撮影を行っている¹¹⁾。

このような撮影を行う中で、1964年の12月号では「装苑・世界一周服飾視察団募集の締め切りが迫りました¹²⁾ (1964-12)」というふうに、世界

一周服飾視察団の開催募集などすら行っている。したがって、『装苑』が海外のモード情報を重要視しはじめたことがわかる。

『装苑』の態度の変化を可能にしたものは何だったのだろうか。結論から言うと、この1960年代前半より『装苑』が持ち始めるパリ人脈の力であり、その人脈形成の帰結に成立した『装苑』パリ支局の活動こそが、『装苑』の海外展開を支えたものだったのである。

実際、パリ支局が開設されるのは、1966年10月のことだが、パリ支局を回顧した「編集後記」には次のように書かれている。「お待たせいたしました。今号こそ本誌の目で現地取材をした'67春夏パリコレクション（ママ）をごらんいただくことができました。このことは十何年前からの私たちの念願でして、パリ支局陣が夜に日を徹して取材撮影した本誌ならではの成果です¹³⁾」というように、海外モード情報を警戒していたはずの60年代前半に関しても一貫して「念願」であったと述べられていることから、すでにこの時期に『装苑』はパリ支局の開設に向けて歩を進めていたのである。

これらの足がかりの基礎となったのが、在仏のメンバーとして、『装苑』が期待していた人々だった。「アメリカに石丸寿代、イタリーに長谷川路可、ドイツに中田満雄、フランスに河野幸恵、高田美¹⁴⁾」と述べられているが、在仏のメンバーは高田美が代表である。高田美は、実は1955年のパリ・コレクション報道のころより、「特派員」として活躍しているのである¹⁵⁾。この現地在住の「特派員」を通じて、記事をつくっていたのである。

この後、海外人脈は、さらに増えていくことになる。「もう一つ、旅からのおたよりのこと。海外モード“ロンドン・ルック”の原稿を、先月号誌上では、パリからの座談会をよせてくださった南部先生に、こんどはロンドンから送っていただきました。実際に先生がごらんになったロンドンのファッション解説です¹⁶⁾」と「編集後記」に書かれているように、海外記事担当は特派員としてしばしば取材に出かける。ここで述べられている南部あきは、60年代に海外情報の書き手として

中心となった人物であった¹⁷⁾。

1965年から66年にかけて、人脈をいかした記事が続々登場してくるのだが、「最後になりましたが、新しいページのお知らせを一つ。それはパリのファニー・ダルナさんからといた〈パリのお嬢さん〉の絵です。…(中略)…なにしろお忙しい方なので、一ページだけですが、いわゆるモードではない、パリの町に見られる流行を、これから毎号『装苑』のために送ってくださることになりました。解説は堤邦子さんです。なお、とりあげたコートのデザイナー、ソニア・リキールさんは、町の流行を作り出すリーダー店「ロウラ」のモデリストです¹⁸⁾というように、デザイナーと関係の深い堤邦子¹⁹⁾や、「ことしのパリ・コレクションには、毎月“パリの町から”でおなじみの吉田大朋さんに特写をおねがいたしました。彼の写真はごらんのように、外国通信社からでは得られない、パリの香りいっぱいの作品です。きっと皆さまのご期待にそえたのではないかと、内心得意に思っているのですが…²⁰⁾というように、吉田大朋をそのメンバーに組み込んでいる。

このように、高田美だけではなく、南部あきや堤邦子、吉田大朋といった人々もまきこんで、パリの取材コネクションを形作っていくことになるのである。

4. パリ支局開設

「今月のパリ・コレクションは、本誌ならではの豪華な取材陣をはじめ吉田大朋氏(在パリ)の力作を発表しましたが、パリ支局の取材開始になれば、なおなお取材網を広げてまいります。ご期待くださいませ²¹⁾と、述べる中で、パリ支局の開設を予告している。

そして、装苑パリ支局は、1966年10月号で開設が報じられた。支局のメンバーは、支局長が松本美代子のみ記されている。しかし、実質は「新聞社や放送局ではそう珍しいことではありませんが、雑誌社で海外に支局を持っているのは、日本では本誌だけです。本誌では、昨年十一月にパリに支局を設け、以来松本美代子記者、吉田大朋カメラマンを常駐させ、毎月現地取材の新鮮な記事

や写真を送らせていますが、このたびひとり増員することになり、藤井郁子記者を去る六月二十一日現地に向けて出発させました。この三人の特派員に加え以前から現地在住の高田美、堤邦子の両女史が顧問として協力いたしております。…(中略)…十月号のパリコレクション(ママ)特報には、この取材陣が全力を傾けて当たります。ご期待ください²²⁾と宣言するような陣容で固められたのだ。

「パリ・コレクションの現地取材に引き続き、モードの檜舞台に活躍中の松本弘子さんの生活をお知らせしました。外国モードも今月からは、パリ支局の取材陣の目でとらえたブーツのおしゃれです。来月からはまたテーマを広く変えてまいります。新しい企画にご期待ください²³⁾というように、海外情報に対して距離をおいていた『装苑』は、とうとう1966年10月にパリ支局の開設を報ずるとともに、誌面に新しい風を吹き込むこととなった。

「ご存じの《パリ支局》発足のご披露が盛大に催されました。本誌の中でもごらんに入れたスナップは二~三百枚もあったのですが、全部お見せできなくて残念です。松本美代子支局長、小林治子、土屋郁子、酒井登代の諸先生…²⁴⁾というように、その後《パリ支局》は『装苑』の重要なセクションとして大々的に広報され、先に述べた「念願」が果たされ、パリコレへの回路が開かれるのである。

このように、パリ支局の開設によって、かつて海外の流行へ日本が従属することへの警戒は消え²⁵⁾、いかにパリコレ情報を早く送るかということが目指されている。いわば、パリ支局の成立とともに『装苑』は海外情報に対する方針を変化させ、海外情報を梃子に誌面を変化させていくことになったのである。

5. 内容の変化

この経緯と並行して、誌面にどのような変化が起きたのだろうか。

第1にサブタイトルとタイトル表記の変化が起こったことが挙げられる。つまり『装苑』の表紙

に「SO-EN」というアルファベット表記が織り込まれるようになったのである。1960年12月号では「服装研究」²⁶⁾と書かれていたサブタイトルが、1962-1月号では、「服装研究」のサブタイトルがなくなり、1963-1月号でとうとう、月の表記の傍に「SOEN」と記載されるのである²⁷⁾。そして1965年1月号で、「FASHION MAGAZINE SOEN」と記載されることになったのである²⁸⁾。また、1966年1月号では、「FASHION MAGAZINE SO-EN」と間にハイフンが入った。こうして、サブタイトルが「服装研究」から「FASHION MAGAZINE」と変化したことは、まさに『装苑』が従来の方針であった「服装研究」という読者への教育的立場から、「FASHION MAGAZINE」という読者へと流行情報を提供する立場へと変化したことを意味するのである。この変化は、貴重な情報を取得するパリ支局の開設準備と並行して行われていったのである。すなわち、読者の関心の変化を『装苑』は敏感に感じ取り、情報を提供する雑誌を目指そうとした。その提供情報のうち中心はパリ・コレクション情報および海外モード情報であった。そういうわけで、サブタイトルの変化とパリ人脈形成の関係が、時期的な同時性以上に関連づけられるのである。

さらに変化は目次の中にも起こっている。それは「SO-EN」というアルファベット表記が、目次にも記載されることである。1966年1月号では、「SOEN」という表記は目次には書かれていないのだが、1967年1月号では「SOEN=JANUARY」と書かれ、漢字よりも位置が上になり、1968年1月号になると、とうとう目次に大きく「SOEN」と入れられ、漢字のタイトルよりも大きくなっていくのである。さらに、1970-1月号では目次が「so-en」と小文字表記になり、ハイフンまでもが入られる。このような雑誌名における漢字からアルファベット表記への移行は、雑誌名の無意味化という流れを先取りしているのである。さらに、記事カテゴリーの中に「SO-EN」という文字が適用されて様々な表現が生まれており²⁹⁾、この時期から『装苑』はアルファベット表記の「SO-EN」としての雑誌的アイデンティティを構築しようと

しているのである。

第2に、レイアウト面の変化も1960年代に改革されていく。「このたび、編集部には外人が入りました。外人を編集部員に持つ雑誌は、日本ではじめてではないかと思います。リチャード・ラトレッジさんで、彼はアメリカのボーグ誌に四年間いて、カメラマン、あるいはレイアウトマンとして名声を馳せ、後、パリに渡り、フランス版のボーグ誌の編集に当たりましたが、日本が好きでたまらず、いっさいをなげうって来日したという変わり者、ぜひ装苑やミセス、ハイファッションなどを手伝いたいという熱望から、装苑に入ったわけです。外人をまじえたファッション雑誌の編集がどういう効果をあげるか、ご期待ください」³⁰⁾と述べるように、外国人の起用によって、レイアウトの方法論的意識を自社に導入した。この年にラトレッジは退社してしまいましたが、その意識は「今月号から編集スタッフが替わりました。下の欄をごらんになればおわかりのように、ファッション、リビング・クッキング、エッセイなどいろいろなグループに分かれました。そしてたとえばファッショングループの人たちは、姉妹誌『ミセス』のファッションも担当するという組織です。雑誌別の担当が内容別の担当に替わったわけです。そのうえアートディレクター制を強化しました。アートディレクターというのは、雑誌の中の視覚的な面において責任をもつ役割です。ですから写真のとり方とか、道具の選び方まで指図しなければならぬ重要な仕事なのです。欧米の雑誌はみんなこのようなシステムをとっています。日本の雑誌では本誌が最初です。その効果は早くも今月号に表れていると思いますが、読者の皆さんはどうお感じですか」³¹⁾という形で、ラトレッジの役割を江島任がアートディレクターとして呼びならわすようになったのである。こうした編集方針における変化も、海外情報を導入しつつ、海外雑誌化を目指して行われた変化だと言えるだろう。

第3に、旅行を中心にしたレジャーとファッションの記事が増加した。1956年8月にすでに「旅の服装手帖」という記事が見えるが、1960年5月に「旅の季節」が特集されると、そこで中林洋子

による「ずいひつ スコットランドの旅」が掲載されたりする。またその翌年には、後のパリ支局メンバーである松本美代子による「世界一周の旅 服装プラン」が掲載されてもいる。そして、1965年1月からパリ支局関係者の一人である吉田大朋による「パリの町から」が連載され始める。また日本国内の旅行ではあるが、1967年2月から、旅に関する連載が始まっており、旅の記事は年に数回ではなく、連載という形で増加しているのである。

1967年7月の「旅=平戸」では、長崎の平戸を背景として撮影されたカラーページのグラビアが6ページ掲載され、2ページが「平戸にて」というタイトルで小藺江圭子によるエッセイが掲載されている。またカメラマンは大倉舜二である。このような旅行記事とファッション記事とが融合した記事が考案されたりしたのである。

パリ支局の設置や海外視察などの経験のみならず、読者の嗜好の変化を捉えた結果、こうした旅行とファッションを絡めた記事が生まれたのであった。

第4に、従来の製図つきの海外モード記事から、製図のない、純粋な海外のスタイル記事へと変貌していくようになる。例えば、1960年代の連載である「OVER-SEAS FASHION 海外モード」で、これには従来写真と製図による解説がついていたのであるが³²⁾、1961年1月になると、この海外モードの連載を南部あきが始めた。南部が書いたとしても、1961年代には図像情報は製図とともに説明されているが、1962年代になると、製図の指示がないものも出てきたりするようになる。1963年には、記事のレイアウトが読み物風になり、徐々に製図による技術解説ではなく、海外の「ルック」の紹介となっていくようになるのである³³⁾。すなわち、作ることよりも装うことに重点がおかれてくるようになったのである。

こうした変化は、洋裁雑誌からファッション情報雑誌へと変貌しようとしていた『装苑』の試みを映し出している。すなわち、読者の志向が変わりつつあることに気づいた『装苑』は洋裁情報とは関係のない旅行の記事を増やしており、同時

に、情報雑誌として『装苑』は海外モード情報を目玉としようとして試みたのである。そのためにパリ支局の確立を求めたのだと言えよう。逆に言うと、パリ支局の確立とは、まさに『装苑』のファッション雑誌化の橋頭堡であったのである。

6. 結語

雑誌『装苑』は60年代にかけて「服装研究」から「FASHION MAGAZINE」というサブタイトルへ変化を遂げた。この変化は、『装苑』が海外の流行情報へ胸襟をひらく過程と並行していた。すなわち、日本の洋裁技術の確立のために雑誌を通して教育を行っていた『装苑』は、海外における流行をも日本へ伝える雑誌に変化したのである。この海外情報を収集する拠点が『装苑』パリ支局だったのである。

『装苑』パリ支局は、組織として現れる前には高田美や堤邦子といった人々に協力をうけ、その基盤を整えていった。1966年10月になると、誌上でパリ支局の開設が報じられ、開設までの苦労とその重要性が語られもしたのである。

日本国内では、海外志向が強まり、高度経済成長の波が訪れた。そのため、『装苑』は旅行やレジャーの記事すら雑誌の中に組み込んでいった。ファッション情報の獲得に海外へと進出した『装苑』は、ファッション情報だけではなく取材力を生かして旅行エッセイなども掲載し得た。それは、読者の志向の変化に敏感に対応した『装苑』の戦略であったのであると同時に、のちにアンノン族といわれる若者たちが現れる変化の出発点を先取りさえもしていたのだと言える。

註

- 1) 高橋知子「『装苑』における欧米ファッション情報の受容について(2)1960年代までの洋裁技術普及への取り組みについて」『愛知学泉大学・短期大学紀要』(38)、2003-12、pp.123-132
- 2) 田中里尚「ファッション・システムの黎明期—主婦之友』『装苑』『暮しの手帖』を中心に」『境界を越えて』(4)2004-02、pp.91-118
- 3) 工藤雅人「『服飾雑誌』の歴史的成立—1950～60年

代の『装苑』の誌面構成と読者の変容に焦点を当てて『マス・コミュニケーション研究』(76)、2010、pp.157-176

- 4) 「編集後記」『装苑』(1960-10)
- 5) 「編集後記」『装苑』(1961-1)
- 6) 「編集後記」『装苑』(1955-10)
- 7) 「編集後記」『装苑』(1962-5)
- 8) 「編集後記」『装苑』(1963-2)
- 9) 「編集後記」『装苑』(1963-4)
- 10) 「編集後記」『装苑』(1964-9)
- 11) 「オリンピアの聖火をたずねて」『装苑』(1964-9)



- 12) 「装苑・世界一周服飾視察団募集広告」『装苑』(1964-12)
- 13) 「編集後記」『装苑』(1967-4)
- 14) 「『装苑』についての20の質問」『装苑』(1956-10)。ここで書かれているメンバーは必ずしも現地在住であったわけではない。例えば、中田満雄は大学の教授であったりしたわけなので、ここでは写真家の高田美がパリの特派員であったことだけを指摘しておく意図で引用されたものである。
- 15) 「秋冬のパリ・モード集」『装苑』(1955-10) p.1では、「写真は本誌山田禎子、高田美の両特派員が他誌に先がけての特写によるもの」と紹介されている。
- 16) 「編集後記」『装苑』(1963-11)
- 17) 南部あきは、例えば、1958年3月号の「ハイティーンファッション」などを担当し、タイトルとはやや離れて、海外をなぞらえながら、記事を書いている。その南部がはじめて特集を担当したのが「特集 欧米のニューファッション Overseas fashion」で、デザイン解説は南部がやり、技術解説は安東武男だった。その後、南部は、街頭スナップを担当したりして、最終的には1961年1月号から「海外モード案内」を担当することになった。
- 18) 「編集後記」『装苑』(1965-3)
- 19) 「先月号でパリ支局のお正月をお知らせいたしました

が、このパリ支局ができたのが昭和四一年ですから、四年前のことです。当時は雑誌社で外国に支局を持つということなど想像もできなかった時代で、パリに支局を持つくらいなら、大阪に持ったほうがまだと笑い草にされました。そしてパリにいる邦人たちの中には、小さな出版社のくせに支局を持つなんて生意気だと非難する人たちさえいました。そういう中で堤邦子さん、高田美さん、岸恵子さんの三人だけは日本のためにもぜひともパリ支局を成功させようとする点で協力していただきました。いまでも心から感謝しております。おかげで先月号でごらんとおり、どうか一人前に育ちつつあります。雑誌社が外国に支局を持つということは、わが国では前例がなかっただけに、開設当初は政府との折衝などでたいへんな苦勞をしました。しかし海外版『SOEN』を出している実績などもあって、やっと許可になったわけでした」と1970年2月の「編集後記」で『装苑』は堤邦子について述べている。

- 20) 「編集後記」『装苑』(1966-4)
- 21) 「編集後記」『装苑』(1966-9)
- 22) 「編集後記」『装苑』(1967-9)
- 23) 「編集後記」『装苑』(1966-10)
- 24) 「編集後記」『装苑』(1967-3)
- 25) 「前年もそうでしたが、今度もまた暮れから新年にかけて約三週間編集部の記事たち十数人がヨーロッパ旅行に出かけます。そのために今仕事の追込みにけんめいです。やはりファッション雑誌を作るにはヨーロッパを見ておいたほうがいいということで、出版局のほうでも大いに奨励しているのです。あちらに行ったらファッションショーを見たり、雑誌社を見学したり、それはそれは忙しい旅ですが…」(「編集後記」『装苑』1970-1) というよう編集部では、海外の流行をモデルとして理解し、ヨーロッパを見ることが「奨励」されていることが解る。
- 26) 『装苑』(1960-12) 表紙サブタイトル



- 27) 『装苑』(1963-1) 表紙サブタイトル



28) 『装苑』(1965-4)表紙サブタイトル。合本の形状により、もっとも鮮明にスキャンできるものを選んだ。



29) 例えば、1968年1月号より連載開始の「SOEN REPORT」や「SOEN CINEMA」、1969年1月号より連載開始の「SOEN GUYS MAP」や「SOEN BOUTIQUE」、1970年1月号より連載の「SOEN GALLERY」や「YOUNG SOEN」など枚挙にいとまがない。

30) 「編集後記」『装苑』(1962-2)

31) 「編集後記」『装苑』(1967-8)

32) 「旅=平戸」『装苑』(1967-2)

33) 南部あき「しゃれましょう、早春に」『装苑』(1963-3)

